
■ さろん | Mail News 2017/12/17 | #105 ■ 【読み物号】

ご案内不要の方はお手数ですがこのメールにそのままご返信ください。

哲学カフェ及び関連イベント情報をお送りします。みなさんの興味・関心の一助としていただくとともに、今後とも「さろん」を応援いただければ幸いです。

なお、このメールニュース掲載のコラム等は執筆者の個人的な考えを表したものです。会や専門領域における統一見解や事象を扱っているものではありません。予めご了承ください。

=====Vol.105 2017年12月17日(日)=====

さ | ろ | ん |

— | — | — |

M | a | i | l | N | e | w | s |

— | — | — | — | — | — | — |

<http://salon-public.com/>

(バックナンバーはHPからご覧いただけます)

<https://twitter.com/salontetsugaku>

<https://www.facebook.com/salontetsugaku/>

=====

INDEX

- | 【お知らせ】(12/21) 座談亭ゆるみんな家／テーマ：「(当日決定)」
- | 【1】コラム／エッセイ
 - ◇ 『クリスマスのイルミネーションを見て想う』
 - ◇ 『Tender is the Night, Indirectly.』
- | 【ご案内】「さろんラボ」企画を募集しています
- | 【2】コトバをハーバリウムする
- | 【3】さろんアーカイブの遊歩道
- | 編集後記

CONTENTS

【お知らせ】

(12/21) 座談亭ゆるみんな家
テーマ：「(当日決定)」

通称『ゆるカフェ』。ゆるやかに営業中です。

今月のテーマは当日募集します。おしゃべりしたいテーマをぜひ持ってきてくださいね。

それもいいね、そっちも面白そうだね、とウロウロしながら、「いま話したいこと」をほりさげてみましょう。

12月21日(木) 19:15 オープンです。

今月も例によって例のごとく少人数で集まって、ゆったり考えたり感じたり聞いたりしてみます。ゆるっと奏でる月イチのセッション、お気軽にいらしてください。

定員5名まで ※最少挙行人数3名

12月21日(木) 19:15 - 21:30頃

渋谷の喫茶店(申込者にご案内)

参加費100円(別途、注文した飲食費実費をお支払いください)

お申込み: salontetsugaku@gmail.com

(幹事: せりざわ)

【1】コラム/エッセイ

▽【クリスマスのイルミネーションを見て思う】 聖理

▽【Tender is the Night, Indirectly.】 セリンジャー

▽【クリスマスのイルミネーションを見て思う】 聖理

ロックバンド:back number が歌う「クリスマスソング」*1 では男がその恋心をこのように詠う。
「どこかで鐘が鳴って らしくない言葉が浮かんで 寒さが心地よくて あれなんで恋なんかして
んだらう 聖夜だなんだと繰り返す歌と わざとらしくきらめく街のせいかな …こんな日は他の
誰かと笑ってるかな 胸の奥の奥が苦しくなる できれば横にいて欲しくて どこにも行って欲しく
なくて 僕の事だけをずっと考えていて欲しいやっぱりこんな事を伝えたら格好悪いし 長くな
るだけからまとめるよ 君が好きだ」。

サルトルはこう述べる*2。「…恋人同士のおのおのは、他方に対して、決して<愛されようとする
企て>に還元されないような一つの愛を、要求する。事実、彼が要求しているのは、他方が、そも
そも愛してもらおうなどと思うことなしに、他方の自由の対象的限界としての「こちら」について、
他方の超越の避けられぬ選ばれた根拠としての「こちら」について、存在全体および最高価値とし
ての「こちら」について、観想的で同時に愛情的な一つの直観をもってくれることである。他方に
対してこのように要求された愛は、何ものをも求めることができないであろう」。

「クリスマスソング」に描かれる男は彼女に対し<“横にいてどこにも行かずに男の事だけをず
っと考えている”心理を欲するが、現実の彼女に対して何ものをも求めることができない>状態
である。ここに哲学者の見方を加えるなら、男は<彼女が、自分を含む誰からの拘束の力からではな

くて、完全に自由なる彼女の意思に基づいて男に惹かれる(=男の存在全体に愛情的な直観をもつこと)をも同時に欲しているのかもしれない。弊会の哲学カフェの例会を普段開催している渋谷公園通りの界隈においても、既にクリスマスのイルミネーションが点灯して、見る人によっては“わざとらしくきらめく街”に映っているであろう。

*1：清水依与吏作詞：「クリスマスソング」

*2：サルトル著：「存在と無」

▽ 【Tender is the Night, Indirectly.】 セリンジャー

忘年会帰りの夜道で、街路はクリスマスの灯りがきらめいて。テッペンに近い時間、最寄り駅から自宅への道を酔いをさましながら歩く。肌を突きさす凍える風が急に吹き付けて来たりして、おもわず前かがみにコートの前をかきあわせたりする。酔いも手伝って「ウーさむい」なんてつい口に出ちゃったりするような、気分もゆるむ夜。つむじ風をやり過ぎて顔をあげると、すぐ向こうから歩いて来るひとと視線がぼったりぶつかってしまう。それがちょっとじぶんのタイプなイイ感じのひとで、「ひとり言聞かれてなかったかな……」と気になって恥ずかしくなると、やっぱりまたうつむき加減になってそのひととすれ違う。——そんな 12 月の夜。こういう夜にはどんな恋愛もうまれてきそうな気がして、だからじぶんとあのひとのあいだでもやっぱりなにか起こるんじゃないか、なんて妄想も捗る年の瀬の、アルコールに余韻に包まれたやさしい夜。

恋人同士がつかないだ手を男性が着ているダッフルコートのポケットに入れているのも冬の風情を感じさせて趣きがある。でもこういうケースにも独特の味わいがある。友人宅のホームパーティ、仕組まれたじゃんけんでペアで料理担当にさせられた男性と女性がいる。薄透明のクッキング手袋を付けて変わりばんこに挽肉を捏ねてる彼と彼女。手袋に残った肉をきれいに取るために、お互いの手が、薄くて半透明なビニール越しに触れあう。直に触れ合ってるわけじゃないのに、体温がしっかり感じられてすこしドキドキしてしまう。「手袋越しじゃなくて直接触れたいな」とおもう彼と、そういう意味では別になんともおもわない彼女。でも彼は直に手をにぎりたいとおもったことで、彼女に対する好意により自覚的になったりするかもしれない。——なにかを介した接触があつて、それがひとつのきっかけになって、より直接的な接触を欲するというような体験。あるいは、「〇〇さんってあなたのこと好きみたいよ」と第三者から聞かされて、急にじぶんのなかにそのひとの存在が浮上してくるようなこと。間接的なこと。

間接キス。じぶんの気になるひととのあいだで起こる間接キスは、やっぱり特別なものとおもう。電車を待ちながら、冷えた身体を温めるように自販機で買ったお茶。あちらが先に飲んで渡されるのかじぶんが先に飲んで渡すのかいずれにせよ、一本のペットボトルを挟んで、受け取るひとには飲むか飲まないかに大別される選択肢が暗黙のうちに提示される。選択肢があるから、つぎに取るアクションでその意思が明確になる。だからこそドキドキするし、結果次第では妙に気恥ずかしくなったりする。時計で計ればほんの刹那かもしれない。でも一方は固唾をのんで“待ち”に徹する時間があつて、他方だけに委ねられる意思決定の瞬間がある。なにかを媒介にしてつながると

きにだけ醸成されるある種の雰囲気。「間接キスなんてキスのうちに入らないから」なんていう台詞自体が、キスに引きずられた意識を反映しているであろうことは否定しきれない。そういう間接的な形式だからこそ見えてくるもの。

昔もらったラブレターのことが思い出される。はじめてもらったラブレターのこと。放課後の教室に呼び出されて目の前の本人から告白された同級生もいたけれど、じぶんがはじめて受けた告白はラブレターでだった。机からペンケースを出そうと思って手をいれたとき、角がピンと立って少し厚みのあるその封筒に触れた。「なんだろう？」と思って出して見て、視認した瞬間に反射的に隠したその手紙のこと。胸が早鐘を打っていて授業になんか集中できるわけがなかった。休み時間にトイレの個室に駆け込んでまじまじと眺めて、制服のポケットに入っているのをしっかり確かめ確かめしながら家についた。封筒を開ける前、恋文が届いたという事実はこんなにもじぶんを挙動不審にするんだなど、浮かれたあたまの片隅でおもったりした。

ラブレターならではの良さというのがあって、こちらのタイミングで、こちらの気に入った場所で、それを開くことができる。開かないこともできる。もちろん見ないで破棄される可能性もある。そして手紙の差出人には、そうした一切切切が——つまり手紙がどうなったのかが——確認できないという不便さがある。その点で手紙を送るというのは、気持ちを届けた相手に対してのある種の信頼の表れだといえるかもしれない。こんなに控えめで奥ゆかしい信頼と親愛の情を示せるのが、ラブレターの良さじゃないだろうか。誰かがじぶんのことを想って文を認め、ていねいに折り畳んで祈るように封をする。そこに籠められたすべての感情がまっすぐじぶんにだけ向けられたもので、この広い世界にこんなにもじぶんのことだけを想うひとがいるんだという事実を、じぶんだけが開くことを許されたその便箋2枚を通じてはっきりと自覚する。その手紙によって、じぶんをなにか特別な存在に格上げしてくれたような気分になることもできる。これだけおおきな内面の変化を、その手紙はもたらすのだ。じぶんのことを強く想ってくれる誰かがいる。——間接的であるからこそそのやさしさ。

世界中の恋愛小説は、ほんとは作者からたった一人に向けられたラブレターなのかもしれない。物語という回りくどいやり方をすることで、一周回ってより力強く、より誠実に想いを相手に届けることもあるのかもしれない。“間接的である”ということには、直接的であるのとはまた違う良さがあるのかもしれない。間接的であるからこそ——直接でないからこそ——わかること、見えてくるものが。

いま、間接的な交流ということを考えている。これまでの実践が基本的には直接的な形式で行われるものだったからこそ、その逆も考えてみたい。間接的な交流を介して旅をする、ということ。“百聞は一見に如かず”という旅の醍醐味を問い直すこと。まだ見ぬものとどう出会うかという“出会い方のデザイン”にこだわってみること。そのために“哲学対話によって仲介される”こと。来年のさろんではその試みを実際に行ってみたい。

ぜひ皆様のご協力を頂戴したいとおもいます。

【ご案内】

「さろんラボ」ではみなさんのやる気とアイデアを募集しています♪

名称：【さろんラボ】

コーディネーター：【大村】

「さろんラボ」、常設しています。このさろんラボではみなさんの「やってみたい」を核に、「さろん」を触媒にして、どんな化学変化が起きるかを試みる場所です。さろんラボは当面継続して設けていきます。

さろんの参加者の手で、以下の2つのイベントがうまれました。

【さろんラボ 001】 「あたまの中を散歩するてつがくカフェ」

<http://sanpo-tetsugaku.jimdo.com/>

【さろんラボ 002】 「哲学カフェ Ante-table/アンティ・テーブル」

<http://ante-table.wix.com/ante-table/>

既存の哲学カフェのカタチに限定せず、みなさんの中で温まっている関心ごとやご興味を添えて、どうぞお気軽に下記までご連絡下さい。みなさんとの新しい化学変化を、スタッフ一同心から楽しみにしています。

▽詳細はこちらまで

salontetsugaku@gmail.com (担当：大村)

【2】

コトバをハーバリウムする #26 (さ)

本のコトバから

「寝ることは無駄なこと、そう思わせる空気がニューヨークには流れている」

——シモーヌ・ド・ボーヴォワール『若い』

「夜になっても遊び続ける」

——金井美恵子『夜になっても遊び続ける』

歌のコトバから

人は誰も ただ一人旅に出て

人は誰も ふるさを振りかえる
ちよっぴりさみしくて 振りかえっても
そこにはただ風が 吹いているだけ
(…)

何かをもとめて 振りかえっても
そこにはただ風が 吹いているだけ
振りかえらず ただ一人一歩ずつ
振りかえらず 泣かないで歩くんだ

——はしだのりひことシューベルツ『風』(作詞：北山修)

【4】

さろんアーカイブの遊歩道 #20 (た)

カテゴリ：【さろん哲学 議事録】 第30回

テーマ： 「ユーモア、について考える」

開催日： 2013年2月11日

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2017/02/salon_giji_30.pdf

ある朝、あなたが気がかりな夢から目ざめたとき、両手の指とツメのあいだからねばっこいへどろみみたいな液体がにじみ出ているのに気づく。止め方がわからない、そもそも何の液体かがわからない。さらにサイテーサイアクなことに、床がしたり落ちた液体によってボコボコと音を立てて溶けはじめている。どこへ行こうとも、そいつらはあなたの周囲を執拗に溶かし続ける。だから誰もあなたを助けに来ることはできない。手を差しのべてくれる人がいるけれど、触れたらもうおしまい、その人が液状化していく。このままいくと、この世界に存在するものすべてを消滅させることになるかもしれない。そうして最後には、あなたはひとりっぽちで、まっくらなつめたい宇宙空間を、プカプカと未来永劫ただよい続けることになる。「神さま、わたしがいったいどんな間違いをおかしたというのでしょうか。清廉潔白とは言わないけれど、人の道を外れずそこそこ正しく生きてきたのに。」

こんな絶体絶命の窮地にたたされる確率は天文学的な数字にのぼるのだろうけど、何気ないひとことからたいせつな人との関係をこじらせちゃったり、ここまで首尾よくやってこれた方法ではたち行かなくなっていたり、歯を喰いしばって努力しているのにいっこうに成果に結びつかなかったり、みたいなことは誰にでも起こりうること。そんなときは全てを投げ出したくなってしまおう。

でもそれってもしかしたら、自分のこり固まった考えにとらわれているときかもしれない。自分は100%正しい、間違っていないのになって信念から動けなくなっているのかもしれない。

現代イスラエルを代表する作家、アモス・オズさんがこんなことを言っています。「ユーモアとは、たとえどんなに自分が正しかろうと、どんなに間違っていようと、人生にはいつでも、かならず少しだけ可笑しい面があることに気づく力。」*

絶望的で深刻な状況を笑って受け止めることができれば、主観から離れて自分を相対化できている兆し。こんがらがって手に負えなくなってる事態をユーモアと余裕を持って疑ってみることは、少しだけ違うものの見方の始まり。そしてそれは、人間だけのスペシャルな才能なんじゃない

かな。

*アモス・オズ『わたしたちが正しい場所に花は咲かない』

2018 さろんイベントカレンダー

▽1/20(土) 9:00-12:00 朝さろん『青い眼がほしい』トニモリスン

▽1/20(土) 15:00-17:00 さろん哲学 テーマ「品 (ひん)」

▽2/12 (祝・月) 9:00-12:00 朝さろん『東京プリズン』赤坂真理

▽2/17 (土) 15:00-17:00 さろん哲学 テーマ「(未定)」

編集後記

メールニュース第105号をお届けします。

こんにちはフクロウです。本年ラストのメールニュースになります。

昨日中目黒でさろん哲学が開催されました。テーマは「振り返る」。

年の瀬まであと少しのどこまで来ているので、このワードがほんとに似つかわしくなってますよね。ふだんと同じように多様な意見がこだまする時間でしたが、お題の性格もあいまって、いつも以上に内省的・省察的な時間になったような気がします。

さろん哲学、朝さろん、夜さろん、さろん・序、あるばか学校、ゆるカフェ、クリパ…と、ことしも様々なイベントをお送りしてきましたがお楽しみいただけましたでしょうか。ご愛護いただきありがとうございました。来年もどうぞよろしく願いいたします。

それではみなさま、よいお年をお迎えになってくださいね！

それではまた次号でお会いしましょう。ホウ。

編集: (フクロウ)

さろん | Mail News 2017/12/17

⇒次号 (1月1日発行予定)

さろん Mail News 第105号 / 2017年12月17日発行【読み物号】

編集・発行: さろん

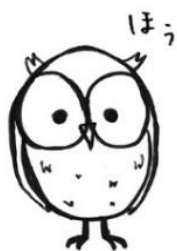
salontetsugaku@gmail.com

<http://salon-public.com/>

<https://twitter.com/salontetsugaku/>

<https://www.facebook.com/salontetsugaku/>

- ◇ 「さろん」にお知らせいただいたお名前・メールアドレスなどの個人情報は、当会からのご案内のためだけに使用いたします。
また、ご本人の同意なく第三者への提供はいたしません。
- ◇ 「Mail News」の無断転載はご遠慮ください。転載ご希望の場合はご連絡願います。
バックナンバーはHPからご覧いただけます。
- ◇ 【Twitter】 <https://twitter.com/salontetsugaku/>
- ◇ 【Facebook】 <https://www.facebook.com/salontetsugaku/>
- ◇ 【ホームページ】 <http://salon-public.com/>
 - 「さろん哲学」Web サイト <http://salon-public.com/tetsugaku/>
 - 「朝さろん」 Web サイト <http://salon-public.com/asa/>
 - 「さろん工房」Web サイト <http://salon-public.com/koubou/>
 - 「あるばか学校」blog <http://alpacagakkou.blog.fc2.com/>



"copyright (c) 2011-2017 さろん. All rights reserved."
